

参考資料（2011年6月29日）

## スイス人による開港当時の横浜見聞録

### 「ブレンワルド・ダイアリー」幕末期翻訳発表会で

日本・スイス通商条約締結までの幕府との交渉過程などの  
詳細情報が明らかに

DKSH ジャパン（本社：東京都港区、代表取締役社長ペーター・ケメラ）は、2011年6月29日、横浜開港資料館（所在：神奈川県横浜市中区、館長：上山和雄）と共同で、ブレンワルド・ダイアリーの日本語翻訳版の第一冊目の完成を記念し、翻訳から発見された情報や、翻訳作業の様子などを公開する発表会を、横浜開港資料館にて実施致しました。

ブレンワルド・ダイアリーとは、1862年12月から1878年2月までの約16年間日本に滞在したカスパー・ブレンワルドが遺した全5冊の日記で、当時の横浜の状況を知る上で貴重な史料として注目されています。ブレンワルド・ダイアリーの1冊目は、1862年12月から1863年12月が記録されており、今回完成した日本語翻訳版は、その中から1862年12月から1863年8月をカバーしています。

6月29日、横浜開港資料館の講堂で開催された発表会では、「ブレンワルド・ダイアリー」翻訳プロジェクトチームから、高村直助氏（公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団 理事長）や、西川武臣氏（横浜開港資料館 副館長）など8名が出席し、ブレンワルド・ダイアリーの史料としての重要性や、翻訳から発見された情報を紹介しました。

また、DKSH からグループ CEO であるヨルグ・ヴォレと DKSH ジャパンの代表取締役社長のペーター・ケメラも出席し、プロジェクトメンバーに感謝すると共に、残る4冊の翻訳への期待を伝えました。

西川武臣氏は、プレゼンテーションの中で、ブレンワルドの日記翻訳から分かった情報として、下記の事柄を紹介しました。

#### 1) 通商条約締結の過程

1863年に横浜に到着したスイス使節団。当時は生麦事件の賠償金支払いや西洋諸国との対立を深める長州藩などの活動によって通商条約の締結は困難な状況にあった。日記ではスイス使節団の滞在の様子や、持参した幕府への贈り物が詳細に記されている。

#### 2) 東アジアでのスイス人商人のネットワーク

日記にはブレンワルドが横浜で商会を設立するのに先立ち、ロンドンで日本との貿易相手を探すための起業活動や東南アジア諸都市でドイツ系・スイス系の商人との人脈を広げるための活動を頻繁に行っていたことが記されている。

#### 3) 多様なシイベル・ブレンワルド商会の活動

シイベル・ブレンワルド商会は、生糸貿易に大きな足跡を残した。日記には1870年の前橋藩（群馬県）の製糸工場設立にシイベル・ブレンワルド

商会が関係したことを示す記述がある。また横浜では、ガス燈にガスを供給する会社の設立にブレンワルドが関与したことも記されている。

#### 4) 居留地の暮らしの様子

ブレンワルドは毎日の暮らしぶりを詳細に記録しており、居留地で暮らす外国人の姿を知ることができる。横浜でのオペラ見物、富士山登山などから、当時、外国人を襲撃する事件が続発し、友人のフランス人仕官が殺害された際の衝撃などが記されている。

#### 5) さまざまな記念日や、初めての日

海の日由来となった、明治天皇が初めて汽船で巡幸した日（1876年7月20日）や、横浜で初めて「夜会」が開かれた日（1863年9月4日）など興味深い記述がある。

なお、完成した翻訳文は、ブレンワルド・ダイアリー日本語版として印刷され、横浜開港資料館の閲覧室にて5月11日から公開されており、一般の方が閲覧できるようになっています。

ブレンワルド・ダイアリー翻訳プロジェクトは、引き続き作業を進め、新しい発見や有益な情報を、随時発信していく予定です。

### ブレンワルド・ダイアリー翻訳プロジェクト概要

ブレンワルド・ダイアリーとは、1862年にスイス連邦政府が編成した通商使節団の一員で、当時商務部責任者として日本に派遣されたカスパー・ブレンワルドが、1862年10月から1878年2月までの約16年間、江戸末期の日本とスイスの通商条約など政治的出来事や当時の社会状況、生糸・茶などの貿易取引などについての日々を、全5冊548ページに記したものです。ドイツ語を中心にフランス語、英語、イタリア語、オランダ語と国際色豊かな当初の書簡の行き来をもうかがいすることができます。この日記を書いたカスパー・ブレンワルドは、日本に到着したときは若干24歳の青年でした。

この日記に関する資料は、スイス本国のDKSH創業者一族が所有するアーカイブ（スイス・チューリッヒ）に保管されていました。横浜港開港とほぼ時を同じくして横浜に創業した当社の歴史が重なることを貴重な事実としてとらえ、歴史的発見に貢献できればとの願いから、2008年3月末より、横浜開港資料館と協力し、ブレンワルドの日記全翻訳プロジェクトに着手しています。

ブレンワルド・ダイアリー翻訳プロジェクトメンバーは、公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団 理事長 高村直助氏、横浜開港資料館 副館長 西川武臣氏、日本女子大学 文学部教授 井川克彦氏他8名。翻訳は、多くの歴史文献の翻訳を手がける 生熊文氏（ドイツ在住）が中心となり進められています。メンバーは定期的に集まり、翻訳をもとに歴史的背景及び、翻訳言語内容の検証などを進めています。

### 横浜開港資料館について

横浜開港資料館は、開港百年を記念して編さんされた「横浜市史」の収集資料を基礎に、1981（昭和 56）年 6 月 2 日の開港記念日に開館。横浜の歴史に関する資料の収集、閲覧・展示・出版などにより一般に公開をする施設です。19 世紀半ばから関東大震災に至る時期を中心に資料の充実に努め、現在、公私文書の記録、新聞雑誌、写真や浮世絵など 25 万点を越える資料を収集しています。資料を通じて横浜の歩みなど次の世代に伝える「近代都市横浜の記憶装置」としての役割を果たしています。

### DKSH ジャパンについて

DKSH ジャパンは日本における最初の外資系商社の一つとして 1865 年（慶応元年）に横浜で創業した「シイベル・ブレンワルド商会」を継承し、以来 140 年以上にわたって、日本とその文化に貢献してきました。当時「横浜甲 90 番館」と呼ばれた商館は日本の生糸取引の中心となり「生糸王国日本」を築きあげる上で大きな役割を果たしました。また、日本最初のガス灯のためのガスプラント設置にも貢献し、明治中期には時計・機械などの輸入を開始するなど、日本に根ざしたスイス系商社として多くの足跡を残してきました。

また、ヨーロッパとアジアという二つの文化の間で調整役を担いながら、お客さま、ビジネスパートナーの皆様からの変化し続けるニーズにお応えし、質の高いサービスをご提供することを目的としてきました。

2009 年 4 月に社名を日本シイベルヘグナーから DKSH ジャパンに改め、スイスに本社を置く DKSH グループの一員として、日本では消費財、生産資材、テクノロジーの 3 つの事業部門でビジネスを展開しています。